二〇一八年一一月一五日　開催

パキスタンの平和、安定、発展をめざして

アリ・アンサー・ザイディ
（執筆＝木村昌人）

■講演者……アリ・アンサー・ザイディ（駐日パキスタン・イスラム共和国大使館　臨時代理大使）
■パネリスト……ミルザ・サミール・ベイグ（駐日パキスタン・イスラム共和国大使館　三等書記官）
■司　会……木村昌人（本学国際コミュニケーション学科非常勤講師）
■使用言語……英語

アリ・アンサー・ザイディ（Ali Anser Zaidi）氏紹介

ラホール大学卒（コミュニケーション・エンジニアリング専攻）、オックスフォード大学外交官特別プログラム修了。
二〇〇七年一月〜二〇一〇年四月パキスタン外務省にて米国、およびインドを担当。二〇一〇年五月〜二〇一三年一一月在アルゼンチンパキスタン大使館勤務、二〇一三年七月〜二〇一七年七月パキスタン外務省米国課長を経て、二〇一七年八月〜現在在日パキスタン・イスラム共和国大使館公使。

〈講演要旨〉

パキスタンの地理と歴史

本日は、パキスタンの概要を紹介しましてから、パキスタンが直面する安全保障や内政の問題についてお話しし、皆さんからの質問をお受けしたいと思います。
南アジアの国家パキスタンの国土面積は八〇万平方キロメートルで、日本の二倍強の広さがあります。人口は約二億八〇〇〇万人で世界第六位です。首都はイスラマバード、最大の都市はカラチ（都市圏人口一〇〇〇万人超）。ウルドゥー語が公式言語ですが、英語も公用語となっています。イスラム教が国教とされ、約九七％の国民がイスラム教徒です。また

民族構成は、パンジャーブ人五六％、パシュトゥーン人一六％、シンド人一三％などとなっています。国連の推計によると、人口が二〇五〇年には三億を超えるといわれています。
北部には世界の屋根カラコルム山脈とヒンズークシ山脈が連なり、世界で二番目に高いＫ２（標高八六一一メートル）とナンガ・パルバット（標高八一二六メートル）がそびえています。スライマン山脈が国の中央を南北に走り、インダス川は北部山岳地帯からアラビア海に注いでいます。この大河は、四大文明の一つインダス文明を生み出すとともに、現在もその流域に豊饒な平野を形成しています。インドとの国境はタール砂漠が、その南にはカッチ大湿地がひろがっています。一般に、三月から五月にかけての春は高温乾燥で、六月から九月の夏は、高温多湿でモンスーンの季節です。一〇月から一一月の短い秋は季節の変わり目で、一二月に入ると冷涼で乾燥した冬となり二月まで続きます。この区分は地域により異なり、洪水や干ばつにしばしば見舞われます。
次にパキスタンの歴史についてお話します。一九四七年に誕生した現在のパキスタンの歴史は太古にさかのぼります。ラーワルピンディー近郊、ポトハー郡、ソーン谷で、五〇万年前の石器時代の人骨が発見されました。なかでもソーン谷には天然石の道具が見つかっており、当時の人類の生態がわかり、ソーン文化と呼ばれています。赤・黄土器時代では、クエッタを含む北バローチスターンのゾーブ文化、シンド州と南バローチスターン州のアムリ・ナル、クリ文化が知られています。これらの先史の文化はインダス文明の発祥のルーツではないかと考えられています。インダス文明で最も栄えた町はモヘンジョダロとハラッパーで、高いレベルの絵画、工芸などがありました。その後、パキスタン地域には仏教とヘレニズムの影響を受けたガンダーラ美術が誕生し、紀元一

アリ・アンサー・ザイディ臨時代理大使

世紀から五世紀までの五〇〇年に現在のペシャワール付近のスワット、ブネール、バジャール地域の美術工芸品は、パキスタン文化の中でも最も貴重なものの一つになりました。南アジア大陸へのイスラム教の伝播は、七一一年のムハンマド・ビン・カシムの訪問から始まり、その後東南アジアにまで伝搬しました。

一七世紀になると、東インド株式会社を設立した英国は約一〇〇年にわたり、経済を中心に様々な分野で南アジアに進出していきました。例えばパキスタンではウルデゥー語に代わり、英語が公式言語とされました。こうした英国の影響は、社会的、政治的、経済的な衝撃を南アジアのイスラム教徒に与えました。一八五七年以降、英国式の訓練を受けたインド兵とイスラム教徒の独立運動組織の間で何度も戦いがあり、

会場の様子

司会の木村先生

徐々に南アジアでの英国の支配が確立されました。シー・シェド・アフマド・カーン（一八一七年―一八八九年）は、英国とイスラム教徒の間を取り持ち、西洋の教育と知識の受け入れが、イスラム教徒や社会の安全を確保する唯一の道だと考え、アリガルーに大学を建て、西洋教育の受け入れを進めました。二〇世紀が始まるころ、イスラム教徒は、英国に対抗するためには、独自の政治組織を持つ必要があると感じ始めました。建国の父、ムハンマド・アリ・ジンナー（一八七六年―一九四八年）がイスラム協会を率いて、英国支配からのがれるためにヒンデュー教徒と連携しました。ジンナーは、イスラム教徒が多数を占める土地をもじり、この地をパキスタンと名付け、イスラム教徒をまとめて行きました。

第二次世界大戦を通じて、イスラム教徒の間でパキスタン建国の構想はより現実味を帯びるようになりました。英国政府は、最終的にインドの分離独立に合意し、最後のインド総督マウントバッテンは、権限の移譲のための最終的な交渉を担いました。イスラム教徒が多数を占める二つの地域、ベンガルとパンジャブが、その後北西辺境とアッサム州シルヘットが加わり、一九四七年八月一四日パキスタン国が誕生しました。一九七〇年東パキスタンはバングラデシュとして分離独立しました。

パキスタンの安全保障

パキスタンはインド、アフガニスタン、イラン、中国と接する南アジアの要衝です。米ソ冷戦時代を通じて、パキスタンは米国と中国とは親密な関係にあります。インドとは独立以来、現在に至るまで三度戦火を交え、カシミール領有権やテロ問題で火種を抱えていますが、二〇一八年には上海協力機構の合同軍事演習に両国が参加し、インドとパキスタン両国が国連平和維持活動以外で初の軍事協力となりました。アフガニスタンにはインドとの対抗上親パキスタン政権が存在することが望ましく、一九七九年のソ連のアフガニスタン侵攻後は反武装勢力を支援しました。二〇〇一年のアルカイーダの米国内での同時多発テロに対しては、米国のアフガニスタン侵攻に協力しました。中国との関係はインドとの関係から長年友好関係にありますが、近年中国に進める「一帯一路」構想の結節点として、中国との国境か南西部のグワダルにつながる回廊建設計画が進行しています。しかし、問題点も多く指摘されるこの壮大な「一帯一路」構想に、パキスタンが今後どのようにかかわってゆくかは慎重に取り組まなければなりません。サウジアラビアなど中東諸国からパキスタンは、イスラム圏唯一の核保有国として一目置かれる存在になっています。

日本の関係

次に日本との関係についてお話しします。先史時代からパキスタン地域と日本とはシルクロードや海上ルートを通じて、経済的、文化的な繋がりがありました。一九三〇年には東京大学と拓殖大学にウルドゥー語研究の学部が設置され、日本で本格的にウルドゥー語とパキスタンの研究が開始されました。一九五一年サンフランシスコ講和会議において、パキスタンは南アジアから唯一出席し、「日本の平和は、正義と公正によって維持されなければならず、復讐や反発の気持ちを抱いてはいけない。将来、日本は世界で社会的、政治的な重要な役割を果たすことになるであろう。」と日本を擁護しました。一九五二年に国交が樹立されてからさらに二国間の関係は進展しました。

一九六〇年、アユブ・イブハル大統領が来日し、翌年には池田勇人首相がパキスタンを訪問しました。この間に、日パの両国間で、ＹＥＮクレジット制度と交換留学生のプログラムが作成され、開始されました。千葉大学を中心としたいくつかの大学で言語と技術を学んだパキスタン学生は、本国に先端技術をもたらしました。ＹＥＮクレジットは日パの確固とした経済的な関係を築きました。ＹＥＮクレジットとは、日本が輸出品の支払いを延長することを認める代わりに、パキスタンは日本製品を優先的に買い入れるというものでした。これは、パキスタンには、良質の製品を安く買い入れることを可能にし、日本にとっては、当時あまり知られていなかった日本製の工業製品の品質を南アジア、中東に広める良い足がかりになりました。

一九八〇年、パキスタン＝日本二国間関係は、パキスタンがソ連のアフガニスタンへの侵攻を食い止める最前線としての役割を基本とした関係になりました。パキスタンは日本が中東から石油を買い入れるための道を確保するためにも良好な関係の維持が強く望まれました。

一九八八年のパキスタンの核実験以来、両国関係は一時冷え込んだこともありましたが、政治レベルの関係が閉ざされることはありませんでした。森善朗首相が二〇〇〇年八月にパキスタンを訪問し、日パ両国の関係がさらに強化されました。パキスタン側もパルヴェーズ・ムシャラフ大統領が同年に日本を訪問し、翌二〇〇一年になると、日本は公式にパキスタンに対してテロリズムの最前線での活躍に対して感謝の意を表しました。二〇〇五年カシミール地方でマグニチュード七・六の地震が発生した際には人道支援を行いました。この地震によりパキスタン・インド両国で七万人を超える死者がでるなど大きな被害を受けました。

二〇〇五年四月三〇日から五月一日に小泉純一郎首相は、パキスタンを訪問し日パ共同宣言を発表しました。その中で、「日パ両国関係は新しい段階を迎え、強くたくましい新しい関係を作る時代になった。」と宣言されました。同年八月にショーカット・アジズ首相が日本へ訪問しました。日本はパキスタンが二〇〇七年に民主国家に戻ったことを歓迎し、民主国家として東京で行われたパキスタン支援国会議へ招待しただけでなく、一〇億ドルの支援を表明しました。また日本は、パキスタンへの食料と緊急支援の援助をすることを明言しました。これらの発表は二〇一〇年一一月一四日・一五日パキスタンで行われた発展途上国支援フォーラムで行われました。二〇一一年二月二一日のアシフ・アリ・ザルダリ大統領の訪日時に、両国は日パ包括的パートナーシップ共同声明を結びました。今まで日本のODAはパキスタンの経済発展に大きな役割を果たしてきましたが、今後も日本との経済関係の拡大を大いに期待しています(1)。

むすび

パキスタンの国家元首はアリフ・アルビ大統領です。二〇一八年総選挙で選ばれた文民政権が交代し、首相にはイムラン・カーンが就任しました。民主主義は安定しているといえます。マクロ経済も人口は二億人を突破し、中間所得層が五〇〇〇万～七〇〇〇〇万人規模で、年六％程度の経済成長を続けているため、将来性のある国と認識され、海外、特にヨーロッパからの投資が増大しています。国内では自動車やオートバイの新車販売が好調です。しかし教育には問題点が多々あります。初等教育の普及率は五〇％に達せず、更に約半数が小学校を卒業できない状態で、技術教育の大きな障害になっています。JICAは二〇〇四年から教育の普及に対す

会場からの質問に答えるベイグ三等書記官

る援助を行っています。

今回のような日本の若い人々との交流の機会を増やし、建国以来の日本との良好な関係がますます発展していくことを希望しています。

質疑応答

ブラジル、メキシコ、スペイン、フィンランド、イタリア、米国、韓国、中国などから留学生を含む約百名の参加者から、パキスタンの民主主義の問題点、女性の政治参加や社会的地位の向上、テロとの戦いの現状、教育制度などについて質問が相次ぎ、それに対してザイディ大使とベイグ三等書記官がユーモアを交えながら懇切丁寧に回答しました。パキスタンを何度も訪問し、同国事情に詳しい宮内孝久本学学長も加わり、内容の濃い討論が行われました。なかでも現在日本では、パキスタン人居住者は約一万五〇〇〇人に達し、埼玉県、愛知県、千葉県に多く住んでいることを考えますと、インドの陰に隠れて、メディアの報道もテロリズムや地震などパキスタンの国内不安に傾きがちななかで、国際的にあまり知られていなかったパキスタンの現状や将来の可能性について理解するよい機会になったと思われます。

注

(1) 外務省によると二〇一六年の対日貿易は対日輸出が一・七一億ドルで、主要品目は織物用糸及び繊維製品、衣類及び同附属品、有機化合物などです。また対日輸入は一九・六一億ドルで主要品目は、輸送用機器（自動車など）、一般機械、鉄鋼です。日本からパキスタンへの直接投資額は、二〇一五年／二〇一六年に三億五四〇〇万ドルでした。パキスタン国内の日系企業は二〇一七年には八二社、在留邦人数は一〇七一人です。

講演後、ザイディ臨時代理大使とベイグ三等書記官を囲んで